

松屋 京橋復歸の賦

多年文語の苑に支援を賜りし伴紀子氏の社長たる池袋松屋は京橋に復歸せり。昭和通り「ぬり彦」の角を京橋に向けて少し入りしあたりの瀟洒たる黒塗りの自社ビルなり。

松屋は、創業元禄三年（一六九〇）の紙、裂地商きれちにして、紀子氏の祖父十五代伴利兵衛、父十六代利兵衛の頃より、宮内廳御用達として、法隆寺裂きれ、正倉院裂きれ、名物裂きれの寫しなどの藝術作品を京、西陣にて企畫製造せし老舗にして、昨今も、奥深きあたりを始め、總理公邸、各種一流のビル、新築歌舞伎座の壁面をも飾れりと言ふ。

松屋の復歸は、折から、新歌舞伎座建設の時に当たり、銀座、京橋界限、お祭りムードに沸く下町の春に、錦上花を添へたりといふべきか。

伴女史四十年前、幼時より馴染みし京橋を離れ、池袋に移りしより、望郷の念已み難きものあり。

三百年の傳統有る江戸辯に慣れし女史にとりては、池袋あたりの、國籍不明の標準語は、流謫されし都城の人の駄舌げきぜつ（聞き慣れぬ耳障りなる田舎言葉）を聞くが如き感ありしならむ。復歸以來、巷の人の言葉、流るるごとく耳に入るとの感を洩らし給へり。

一夕、伴女史の感懐に接するの機會あり。その席において、余 戯れに一詩を賦せり。然れども、余平仄の法を知らず。遙かスリランカなる王蒼海大居士に添削を仰ぎ左記の詩を得たり。

大江戸華京橋春

大江戸の華、京橋の春

歌舞伎座又一新

歌舞伎座もまた一新するにあたる

時遷不渝下町情

時遷うつれども渝かはらず 下町の情

望郷幾歳夢中巡

望郷幾歳、夢中に巡りしか

思へば、戦争、敗戦、復興期において、日本社会激しく變動し、數多傳統有る戦前の舊家老舗、没落流亡し、その子弟は過去の榮光を懷古するのみなり。

かつての戦國の世には、數多くの名門舊家没落し、山中鹿之助の如き遺臣の御家再興の努力は、後世の語り草とはなれども、實のみりし例は寥々たるものなり。諸葛孔明も、また、出師の表に、「漢室を興復し、舊都に歸らむ」と謳ひて出陣せしも、志半ばにして五丈原に憤死す。

これを思へば、女手にて、祖宗の事業を繼ぎて今日の隆盛をもたらし、錦衣をまとひて、故郷に歸られし伴女史の事業感嘆するに足る。

文字通り「孔明もはだし」にて逃ぐる偉業と言ふべきか。

平成二十五年春

岡崎久彦